

●プロローグに似ている

ポップパンクが街中に溢れかえることを夢見ていた。ずっと昔から。そして今も。

●古着屋のキラージューン

当時の僕は何をしていただろうか。甘ったるいアイスクリームを食べていたかもしれないし、緑と白の縞々のボーダーを求めて、古着屋を渡り歩いていたかもしれない。

なににせよ大した学生ではなかったに違いない。犬も食わない犬学生。

そんな棒にも当たらない体たらくだったから、久しぶりに会った女性がばつさり髪を切つていても、それを指摘することなんてできるわけがなかったのだ。

できる、わけが、なかったのだ。

「私、結構ショック受けたんだけどな」

彼女は短くなった髪をいじりながらそう言った。

「忘れられていたのかと思って」

「ねえ」と僕は言う。

「君は求める相手を大いに間違えてる。反省した方が良いい。だってさ、久しぶりに会ったレデーが大きく雰囲気を変えてたら、僕みたいな人間は自分の認識の方を疑ってしまう。あっえっ？ あっあっ……うーっす。て言うのが僕の限界。人間だもの」

よくわからない、と彼女は言った。

そして彼女はよくわからない顔をした。

おそらく僕もよくわからない顔をしていた。

●閃光の走った夏

幼い頃、街の中でポップパンクを聞いたことがある。明るくて繊細で元気はつらつとした曲だった。ような。

僕は今でも、あのとき耳にしたポップパンクを求めている。でも残念なことに、その曲がどんなメロディーだったか、そしてどんなボーカルだったかどうしても思い出せない。

それは僕が一瞬の光のような生き方を求めているからかもしれない。

でも多分、と僕は思う。

それは決して、失われたわけじゃない。

思い出せないだけだ。

僕はそう思う。

なぜなら、僕はポップパンクを聞いたたびにあの閃光の走った夏を思い出すからだ。

●こんな結末があってもいいじゃないか

そんなことを考えながら歩いていると、僕はふと入道雲のような横断歩道の向こうに、見知った女性が立っていることに気がついた。

ビートルズのTシャツにブルーのジーンズを履いた、すらりとした女性。髪は首のあたりでバツサリと切つていて、耳からは赤いイヤフォンを垂らしている。

僕はまじまじとその女性の姿を見た。僕は手元のスマートフォンに目をやったあと、もう一度彼女の姿を見た。彼女は消えることなくそこにいた。目の前を巨大なトラ

ツクが通り過ぎたあと、彼女の姿は消えることなくそこにあった。彼女はどっかの映画のように、電車が通り過ぎていくうちにその姿を消す、なんてことはしなかった。

「久しぶり」と彼女は言った。「元気にしてた？」

「まあまあ元気です」と僕は言った。

「何してるの？」

「ビートルズの真似」

「そんなのは見ればわかるよ。どこに行くのかって話」

僕は二度後頭部を掻いた。

「タバコを買いに行こうかなって」

「まだ吸ってるの？」

「僕はもうあまり吸ってないよ。吸うのは友人たちだけだよ」

「またモノポリーかなにかで負けたんでしよう」

「そう言うって彼女はにつこりとほほ笑んだ。」

「その通り」

「私もついていっていい？」

「いいよ、と僕は頷いた。」

大粒の涙がアスファルトに水たまりをつくった。

●素敵な名前

僕はポップパンクが好きだ。

「ポップ」に「パンク」。響きが良い。破裂音が三つも入っている。あの「ポップコーン」ですら二つしかないのに、ポップパンクにはその一・五倍もの破裂音がある。

だからなんだ、と言ってくれるな。

この世をしごとく生き抜いていく上で、形というのはすごく大事なことだったりする。

例えば芋虫。大抵の人間は芋虫のことを毛嫌いしているけど、もしあれの名前が「マイケル」だったらどうだろう。蛾みたいな悲鳴をあげる人間は、今の半分以下になるんじゃないだろうか。

まあそんなことは凄くどうでもいい。凄くどうでもよくて、要するに僕が好きになった音楽には、すごく素敵な名前がつけられていたということだ。

そして彼女もまた、素敵な名前を持っていた。

僕がその名前を呼んだことはないのだけれど。

僕は彼女を見るとよく、田舎のバス停を思い出す。

●キャンパスライフは楽しい

前にも言った通り、僕の大学生活は決して華やかなものではなかった。でも今にして思えば、それは決して悪いものではなかったと思う。サークル仲間とはそれなりに上手くやっていたし、なんとなくだけ好きな人もいた。

そしてなにより、森下という親友が僕にはいたのだ。

洗濯機を破壊する男、森下。

「俺はね、一週間前に洗濯機を壊したんだ」

ある日のこと、彼はお昼のパンを食べながら突然そう言い放った。

「それはもう再起不能くらいゴゴゴに。だから、洗濯物は溜まりっぱなしだ。頭が痛い。コインランドリーに行くのもめんどくさいから、脱ぎ捨てた服が安物の絨毯みたいで部屋に敷き詰められてる」

だからね、と彼は言う。

「死んだコーリーのことを考える暇もないんだ」
僕はその日から彼を見習って、「死なない程度に生きる」ことにした。断じて一瞬の光のような生き方など求めない。とことん長く息をしてやろう。

——僕の話はいい。

僕の知る限り、彼ほどしごとく生きている人間はいない。煙草を山のように吸い、ことあるごとに洗濯機を破壊する。

僕の親友はそんな人間だった。

そんな彼にポップパンクの話をしたことがある。

こんな風に。

「昔、街中でポップパンクを聴いたんだ。もう随分前の話なんだけど。僕は今でもあの日の衝撃を求めている」

「バカヤロウ」と森下は言った。

「お前の生き方は間違ってる」

●愛煙家とサーフボード

森下は高校を卒業する日もタバコを吸っていた。彼はハイスクールライフ最後のタバコを吸い終えると、しばらくちやになつたワイシャツの胸ポケットにしまった。

校門前に来ると、三人のガールフレンドが彼の第二ボタンを欲しがった。魚のように群がる彼女らはみな彼の後輩で、学校でも一目置かれるような美人だった。

その楽しいイベントが済むと、彼の恩師である中島先生が肩を叩いた。

「よお。お前もとうとう卒業か。なんか感慨深いな」

「先生にはお世話になりました」

「ああ。お前にはずいぶんと手を焼かされたよ」

「お恥ずかしい限りで」

「まあなんだ。お前はやんちゃだったけど、なんだかんだ見どころがあつたし、大学に行っても頑張れよ」

そう言つて、中島先生は彼の胸の辺りをポーンと叩いた。刹那、先生の顔が曇る。

「お前ちよつとこっち来い」

その後、彼の姿を見たものはいなかった。

空にはサーフボードのような雲が二つ浮かんでいた。

「で？」と僕は言う。

森下は顔を曇らせた。

「で、とはなんだ」

「この話を僕にした理由はなんだ」

「ないよそんなもん」

坂の途中でふと眼下に目をやると、シテイライトが夕闇の中に浮かんで見えた。

二台の赤い車が僕らを追い越して行つた。ナンバープレートは読み取れない。テールランプは静かに小さくなって消えた。

●新しい夜明けがやってくる

東の空がぼんやりと白み始めた。薄いピンクと、さらに薄いブルーが、曖昧な境界線を作り出している。要するにぼんやりとした朝焼け。ただそれだけ。

僕は結構この瞬間が好きだったりする。爽やかなロックも悪くはない。でもやっぱり新しい一日の始まりにはポップパンクを聞いていたい。

終わっていくもの、過ぎ去っていくもの。その繰り返しの中で、必ずやってくる新しいもの。

ブランドニューディ。

僕はそれを、自分が最も愛するものと一緒に迎えたい。鮮烈な朝日が街の向こうから顔を出すまで。

僕らはとにかく酒を飲んで夜を明かし続けた。

そうして初めての夏が来た。

●伊豆旅行

大学一年生の夏、風のない月曜日のことだ。

「伊豆に行こう」と森下は言った。

森下と初めて言葉を交わしたのは、小学五年生の時だ。

場所は今と同じような図書館のロビーだった。

僕は「ペンギン・ハイウェイ」を読んでいて、森下は

「アメリカの鱒釣り」を読んでいた。ひよろりとした彼は、書架に囲まれたピラミッドのように狭い通路を難なく歩くことができたし、一番高いところにある海外文学のコーナーにも手が届いた。

そのときと比べると、僕は随分と広いところまで駆け抜けて来たものだと思う。

目的地は下田、と彼は言った。

●陰鬱しりとり in 伊豆旅行

僕らは江ノ島を目指して、都会とも田舎とも言えない道を、ただひたすらに歩いていった。道端の畑は今日も畑としての仕事をまっとうしていて、その雄姿に拍手を送るのは僕らだけだった。それに応えてか、茄子によく似た白い雲がたまに影をつくって、僕らの汗をひっこめてくれる。

「陰鬱しりとりでもしよう」と森下は言った。

「なんだそれ」

「陰鬱になる言葉しか使っちゃいけないしりとり」

「最高だな」

「じゃあしりとり」

「履修登録」

僕らは二人して陰鬱な気分になった。

●僕の飼っていた犬の話 in 伊豆旅行

僕は犬の中でも、バーニーズマウンテンドッグが好きだ。バーニーズ・マウンテン・ドッグ。白黒茶の三色毛深い体質で、夏を苦手とするタイプの大型犬だ。僕の飼っていた犬「ネバーギブアップ」は、暑くなると大きなたれ耳の中が痒くなるみたいで、後ろ足でしょつちゅう耳をガリガリやっていた。それから氷を食べるのが好きで、僕はよく自分のコップに入れるついでに、三個床に落としてやった。するとネバーギブアップはその音を敏感に聞きつけて、舌を出しながらハカハカとやって来たものだ。

今は来ない。ただそこに水たまりができるだけだ。

●ロックンロールとはこういうことさ in 伊豆旅行

日が暮れると、はるか遠くの方に街の光が見えた。緑、青、赤色の街灯がチラチラと闇の中に浮かんで見える。僕らは目の前に見えるその光を目指して、ただひたすらに歩き続けていた。木々の間を走るコンクリートの道には、砂利を踏む音と虫の音しか響かない。

僕は結構、夏の夜の清涼感が好きだったりする。透明感のある空気に、どこか遠い人々の喧騒。

「詩人だね」と森下はタバコをふかして言った。

さつきから僕たちのペースはあり得ないほど落ちていた。足は鉛のように重たいし、股関節は足を踏み出すたびにギイギイと軋んだ。そしてなにより、森下が何も無い所で派手にすつ転んで、足をありえないほど痛めていたのだ。

「なあ」と足を引きずりながら森下は言った。

それつきり彼は口を開かない。

話す気もなさそうだった。

「なんだよ」と言おうとした、そのときだった。

凄まじい音とともに、プールをひっくり返したかのような雨が降り出した。一瞬で遠くの街が霞んで見えなくなり、その辺の雑草が激しく揺れ動いた。

「ビールかけみたいだな」と森下は言っつて、いまいましてに靴でタバコをもみ消した。

カーテンのように降り散らかす雨の中、僕はなぜだか愛犬のことを思い出した。

彼女は朝から階段の下にうずくまったまま、立ち上がれなくなっていた。いつもは僕の姿を確認すると尻尾を振りながら嬉しそうに寄ってくるのだが、今日は腰を浮かすことができなかった。

彼女は一度だけ立ち上がりかけた。小刻みに震える前足を立てて、彼女は必死に腰を浮かそうとしていた。今にして思えば、彼女は最後の力を振り絞っていたのかもしれない。

あのととき彼女はどこへ行きたかったのだろうか。

僕はそのときのことを思い出すと、どうしようもなく悲しくなる。

「やはり僕も洗濯機を壊すべきだったのかもしれない」と僕は言った。

僕の隣の黒いシルエットはピタリと足を止めた。

「その生き方は間違っている」

「そうかな」

「この俺が言ってるんだ。間違いない。そんなことをするよりも、犬の墓にビールでもかけてやった方がよっぽどましだ。ビールがなければ小便でもいい。色も匂いも似てる」

「じゃあ帰ったら二人で小便かけよう」

「お前だけやってる馬鹿」

僕は泣きながら、森下は足を引きずりながら、とにかく歩き続けた。

雲が切れて雨が弱まったころ僕は夜が明けかけていることに気がついた。水平線の向こうに朝日の予兆が見える。見下ろした先に、缶のタブのように海岸線から飛び出した江ノ島が、光を浴びてキラキラと光っていた。あまりにも美しく光っていたから、もしかしたら光っていたのは僕たちの目の方かもしれない。なんて思ったりもした。そんなことを言うとそんなことを言うなと森下は言うかもしれないけど。

なにせよ僕たちはついにやり遂げたのだ。夜通し歩き続けてついに江ノ島に到達したのだ。

僕と森下は固い握手を交わすと深々と抱き合った。

「やったな相棒」と森下は言った。「臭いけど」

「遂に成し遂げたな」と僕も言った。「ミッシェンコンプレイトだ」

そうして僕らは坂を下って意気揚々と街に乗り込むと、手始めにコンビニに寄って色んな食べ物を買って込んだ。そしてそのあと朝六時の海岸線で最高の朝食を食べた。

「なにやってるの」と彼女は言った。

僕らが江ノ島の堤防の上でタマゴのサンドイッチを頬張っていると、向こうの方から一人の女性がやってきた。なんか見たことあるようなシルエットだなあと思っていると、向こうも同じことを感じたのか、ゆつくりと僕らの方に近づいてきた。

「人生最高の朝ご飯を食べているんだ」と僕は言った。

「そっちこそ、こんな朝早くにどうしたの」

僕がサークルに入ってから実に三か月が経過していたが、彼女とはちゃんと話したことはない。

朝の散歩、と彼女は言った。「旅行に来てるの」

「いいなあ」と僕は言った。そして残りのサンドイッチを口に突っ込んだ。

彼女は僕と森下をそれぞれ見比べた。

「なんだかボロ雑巾みたいな見た目してるけど」

僕は遠路はるばる東京から、夜通し歩き続けたことを説明した。

「それで？」

「それではなんだ」と森下。

「なんのためにそんなことをやったの」

僕と森下は食べ物を口に運ぶ手を止め、数秒の間沈黙し、そのあと同時にこう答えた。

「伊豆の踊子に会うため」

彼女はきょとん、とした顔をした後、はじけたように笑い出した。

僕はあつけに取られて彼女を眺めた。彼女は天然水のCMのように純粹に笑っていた。

朝の風がようやくこの辺りに吹いて、僕はもつともつと吹いてくれ、と思った。

なおも笑い続ける彼女を僕はじつと見つめた。そして僕はこの時初めて、彼女の雰囲気が変わっていることに気がついた。

彼女にはポップパンクが良く似合う。

●プールにて

僕はポップパンクが好きだ。曲の明るい所が好きだ。

海辺を歩いているような気分になる。空には二匹の魚のような雲が浮かんでいて、遊歩道のコンクリートはコーヒーよりも熱い。

そんな話を彼女にしてみた。市民プールに二人で行った帰り道、バス停に並んで立っている時の話だ。

「そういえばさあ」と彼女は言う。

「むかし、一度だけポップパンクを聴いたことがあるんだよね」

僕は驚いて彼女を見つめた。

「いつだったかは覚えてないなあ。でもけっこう昔だったと思う。エルレガーデンとかが流行ってた時代じゃない？ 知らないけど」

僕は、CDショップの前を歩く彼女と、明るい曲調のポップパンクを想像した。

僕はその光景に、ある種の何かを見出せそうな気がした。むかし失くしたパズルのピースのような、何かだ。

思い出そうとやっきになっっているうちに、バスがグレーの煙を上げてやって来た。

「次プールに行くときは、もうちょっと広いところに行こうよ」と彼女は言った。

「そうだね」
僕と彼女は市民プールの狭さを知って、はじめて海の広さを知った。

●スタートラインはいつだって

ちなみに本はいつでも僕らのスタートラインだ。いつでも僕らの始まりには本がある。例えそれが意図したものでも、そうじゃないものでも、大抵の場合それなりに良いスタートが切れる。

気がする。

なににせよ僕らのスタート地点はいつも図書館だった。中国人が経営する小粋なバーでもなければ、海が見える駅前一等地に建つ研究所でもない。僕らのホイッスルが鳴る場所はいつでも、とにかくイワシの群れのように本が集まる場所、図書館だった。

連なる山脈のような本棚たちは、間違いなく僕らの原点であり、きつとゴールラインでもある。僕らがまだ幼かったある日のこと、僕たちはカラフルな表紙の行列を横目に、勢いよく図書館を飛び出した。上空には絵に描いたような青空が広がっていたのを覚えている。

僕らはただ次の図書館を目指して走り続けた。もちろんそれは楽な旅ではなかったはずだし、今でも決して楽じゃない。甘い思いをすることもあれば酸っぱい思いをすることもある。泣いたり笑ったり、怒ったり転んだり。モハメドアリ。

でも結局のところ、僕らはいつも鼻歌を歌いながら旅をしている。ポップパンク、ガレージロック、ユーロビート。つまるどころ、次に辿り着く図書館を想像しながら歩くことは、なんだかんだ言って結構面白いのだ。

そうして僕らは大学生になった。

●押入れの布団の押し売り

僕の住むアパートは、大学生の夏休みよりも長い坂の上にある。だからだらと緩慢で、メリハリのない、コンクリートのような坂だ。

夕焼けも手を振ってさよならしようとしている時間帯のこと。僕がよろよろと坂を登っていると、向こうから帯島さんが下ってくるのが見えた。

両手に下げたスーパーの袋が、釣り合いのとれた天秤のように揺れている。「Radio Radio Radio」と書かれた水色Tシャツ一枚に、Gパンというラフな格好で、夏の夕暮れを存分に楽しんでるようだ。

「お疲れ様です。何してるんですか。こんなところで」

帯島さんは僕の姿に気がつくとき、奇遇ですわと言わんばかりに近づいてきた。

「家が坂の上にあるんだよ」

「先輩の家ってこの辺だったんですね」

帯島さんは僕の姿をまじまじと眺める。

「なんでそんなに疲れ果てるんですか」

「トウモロコシ畑を作ってるからだよ」

僕は帯島さんを見ると、夏の陸上部を思い出す。

本人は背の低さを気にしているが、自動販売機の一番高いボタンに手が届くなら、なにも問題はないと僕は思う。

帯島さんはセブンアップを買った。

「亮介先輩は、何らかの形で区切りをつけたいんじゃないかと思うんですよ」

「ほう」

「ほら、去年、亮介先輩のおばあさんが亡くなったじゃないですか。それ以来先輩ずっと元気がなくて、おばあちゃん子だったですし、ずいぶんとシヨックだったみたいで」

僕はビニール袋から飛び出ししている大根を見つめた。

「だから、たぶんトモロコシ畑を作ることで、なんとか気持ちに区切りをつけたいんだと思います」

大根は夕闇の中でぼんやりと浮いている。凄く白い。

「やってることは意味わかんないくらい遠回りですけど」

「でもそれなら僕を巻き込む必要がない」

「先輩はたぶん信頼されてるんですよ」と彼女は言った。

「嫉妬しちゃいますね」

「馬鹿言え」

帯島さんはセブンアップをぐいと飲み干した。

「冗談はさておき。どこに置いてもいいですけど。私からしたらお二人はどっちもどっちですけどね。最近のお二人はあり得ないくらい覇気がない。元気がない。まるでやる気を感じられない」

「そんなにか？」

「そんなにです。見るに堪えませんね。押入れにこもってる布団の方がまだましです」

帯島さんは美しいフォームで空き缶をゴミ箱に投げ入れた。

「まあでもなんにせよ、私はお二人に元気になって欲しいですけどね。うだうだされても鬱陶しいだけです。まあ、だから、きつと一人で畑を作るしかないんですよ。そうです、一人で。最後はいつだって自分しかいません

から。自分で立ち直るしかないです。第三者が邪魔するのは良くないです」

砂を払いながら帯島さんは立ち上がった。

「私、味噌汁を作らなきゃいけないので、もう帰りますね」

声を掛ける間もなく帯島さんは歩きだした。すたすたと坂を下っていく帯島さんの姿が、徐々に小さくなっていく。

僕は何とも言えない気分ですれを見つめながら、なんだか上手いことはぐらかされたなと思った。

帯島さんにも。森下にも。

「きつと一人で畑を作るしかないんですよ」

そうなんでしょうか。全然意味わかんないけど。

でもまあきつと、たぶん、一理あるのかもしれない。

二理はないけど。

●直角と平行

僕はポップパンクが好きだ。

シンプルな感じが好きだ。

そして彼女はいつでもシンプルだった。

「意味のあることは、もともと意味なんか探さなくても意味のあることなんだろうね」と彼女は言った。

僕が九十度に首を傾けていると、彼女は機嫌よさそうに続けた。

「後づけ理論ですよ。野球観戦に行きたいと思ったら、行けばいいんですよ。何で野球を見に行きたいかなんて考える必要ないでしょ？ そのことに最近気がつきまして。なんだか気が楽なんですよ」

「そっすか」

「そうです」

「でもさ、考える必要があるときもあるんじゃない？」と僕は言ってみた。

すると思いがけず彼女は眉間にしわを寄せて考え込んだ。うーん、うーん、と唸っている。

まあそのときは、と彼女は言った。

「そのときに考えればいいのではないのでしょうか」

それもまあ、そうかもしれない。

と思ったりしなくもない。

●お馬鹿さんが読む雑誌

女性を落とす方法をとある雑誌から学んだ。

「女性をモノにする方法」

●とにかく褒める

●まめに電話をする

●女性の喜ぶ話題を収集し、楽しませる

●女性の話題は、いかにつまらなくても興味深そうに拝聴する

●清潔でたくましい体型を維持する

●いかに重くても、女性の荷物は全て持つ

●呼びつけられれば、すぐに参上する

●豪華な食事とワインをこちそうする

●高級なアクセサリをプレゼントする

●常に「愛している」という

以上が、その雑誌に書いてあった女性の扱い方ということだけど、僕はここにもう一つ条項を追加したい。

「そっすか」

●女性が髪を切ってきたら、必ず「髪を切ったね」と言う。

大学二年生の春、僕はとある女性と仲良く並んでプー
スに座っていた。女性というのは、帯島さんのことでは
ない。ポップパンクが良く似合う彼女である。彼女と会
うのは二か月ぶりだった。というのも長ねぎよりも長い
春休みが明けたのが、つい先日のことだったからだ。

「ねえ」と彼女は言った。

「私、髪切ったんだけど気がつかなかった？」

僕は本を閉じて机の上に置いた。

「もちろん気がついていたらよ。それは」と僕は冷静沈着
に言った。

「けっこうショックだったんだけどな。認識されてなか
ったのかと思って」

僕はばれない程度に彼女の髪を眺めた。

彼女の黒い髪は首のあたりでバツサリと切り揃えられ
ていて、耳がびよこりと顔を出している。前に会った時
は大腿骨のあたりまで髪を伸ばしていたはずだから、な
んだか強烈な違和感がある。もちろん悪い意味ではない。
言うなれば、好きな漫画の打ち切りが妙に清々しいのと
同じ感じだ。

「認識はちゃんとしてた。それはもう去年入部したとき
からね。伊豆のときもそう」

「江ノ島」

「そうとも言う」

彼女はなおも不服そうな顔をしている。

「ねえ」と僕は言った。

「君は求める相手を間違ってる。久しぶりに会った女性

がね、大きく雰囲気を変えてたら、僕みたいな人間は自
分の認識の方を疑ってしまうんだ。僕の記憶がおかしか
ったんじゃないかって」

そもそも僕と彼女は大した接点があるわけではない。

サークルの同期と言っても、サークルで挨拶を交わす程
度のものであったし、それ以外だと挨拶する機会すらない。

彼女が愛猫家なのか愛猫家なのかも知らない。

要するに、僕は彼女のことをよく知らないし、彼女も
また僕のことをあまり知らないはずだ。

「そうかなあ」と彼女は言った。

「そうだよ」と言ってから、僕はなんだか少し申し訳な
い気持ちになった。僕はどうやら彼女のことを多少なり
とも傷つけてしまったようだ。

彼女はしよぼくれたように前髪をいじっていた。

理想と現実。最高と最低。そしてただの人間風情。

要するに、僕はけっこう過去を引きずるタイプの人間
だったりする。

彼女と話らしい話をしたのはこの日が初めてだった。

人間、暇になると碌なことを考えないもので、僕は茶髪
の人間の話が彼女にした。

茶髪の人間は小説を読まない。

茶髪の人間は急須でお茶を飲まない。

茶髪の人間はキャディラックを好む習性がある。

一方、彼女は僕にヘラクレスオオカブトとボブ・サツ
プの話をした。「最強」という言葉の響きが好きだ、と彼
女は嬉しそうに言った。ボクサーよりも速いパンチを打
てるようになりたいらしい。やがて彼女はシュツシュと
口で言いながらシャドーをし始めた。

僕は彼女のことを品行方正で聡明な女性だと思ってい
たけど、実は結構ほんこつなんじゃないだろうか。いつ

も一人寂しく酒を飲んでるくせして、焼き鳥屋に行くた
びに「たまには一人飲みも悪くないなあ」とか言ってる
タイプの人間ではなからうか。

僕は改めて彼女をまじまじと見た。

僕がかつて、ビートルズのTシャツを着た彼女を食堂
で見かけたことがある。窓際の席に堂々と座り、黄色い
陽だまりの中でダブルカツカレーを頬張る彼女。そんな
彼女には、悔しいけどビートルズがよく似合っていた。

でも、今の彼女にはポップパンクが良く似合う。昔の
彼女の髪は退屈な授業よりも長かった。それはもう長か
った。でも今は清涼感を感じるくらい短く切り揃えてい
る。

かつての彼女は猫。今はすこく犬だ。

新歓ついでに帯島さんの話をする。

帯島さんが「こんにちは」と声をかけて来た時、僕た
ちはさながら映画館の受付嬢のように、仲良くぼんやり
と座っていた。午後三時くらいのことだ。

帯島さんは水色をベースにした「Radio Radio Radio」
と書かれたTシャツを着ていて、右手にはミネラル麦茶
を持っていた。ミネラル麦茶。透明感のある響きだ。そ
して彼女がアスファルトを踏むたびに、水色のスニーカー
から爽やかな風が吹いて見えた。

これは比喩じゃない。

「あまり小説を書いたことないんですけど」と帯島さん
は言う。

「レベルとかは気にしなくて大丈夫」と僕たち。

「まったく書かない人だっているんだから」と僕は続け

る。「自慢じゃないけど僕だってそうだ」

実際のところ、僕はまったく言っていないほど創作に向いていない。理由は二つある。一つ目は、明確なゴールを設定することがあまり好きじゃないということ。赤い飛行艇を乗り回すイタリアの賞金稼ぎの話とか、短い夜を歩く黒髪の乙女の話とか。見たり読んだりするのは好きだけど、自分で考えるのは得意じゃない。これが一つ目。

そしてもう一つの理由。こっちはかなり致命的だ。というのも、僕は冗長な文章を書くのが大好きで、しょっちゅう話が脱線する。好みの女性の話をしていたら、いつの間にかガムの話になってたこともある。だから僕はいつも不安を感じながら文章を書くことになる。僕の書いている小説は果たして面白いのだろうか、読むに値するものだろうか、といった感じで。

帯島さんは安心したように微笑んだ。

「ちなみに好きな小説とかは」と僕は尋ねた。

帯島さんは口を横一文字に結んで黙り込んだ。緊迫の二十秒間。やがてゆっくりと口を開いた。

「伊豆の踊子ですかね」

「クリアです」

女性の落とし方を書いた雑誌には、男性の落とし方についても書かれていた。

「男性をモノにする方法」

●脱ぐ

●鱒を釣りに行く in 合宿

大学二年の夏、僕は森下から好きな女性のタイプを尋ねられた。ミランダカー、レイジエブセン、ニルヴァーナ。当時は美人なんて街中に溢れかえっていた。

「いないなあ」と僕は言った。

「いないか。じゃあ好きなタイプの女性は？」

森下はタバコに火を着ける。

「どうしたんだ急に」

「いいから」

僕は雨上がりの電線を見あげた。

「ロングよりはショートの方がいい」

「それから？」

「半袖のTシャツが似合うとか」

「ほう」

「タバコなんかもカッコいいね」

「性格的な面では？」

「そうだなあ」と僕は言う。

「猫よりは、犬って感じかな」

ふーん、と言って森下は口笛を吹いた。「意味わかんないな」

「で？」と僕は言った。

森下は首をすくめた。

「俺だってやりたかないよ。こんなしょうもないこと」

「意味わかんないけど」

「俺も意味がわからん」

僕は味の無いガムを噛んでいるような気分になってきた。オレンジ色のガムだ。

「なんだか嫌な予感がするな」と僕は言った。

「なんでもいいよ。俺は鱒釣りがしたい」

「それなら明日上流にでも行くこうか」

いいね、と森下は言った。僕たちは古くも新しくもない宿に帰って、夕食まで寝転んですごした。

●モノポリー頂上決戦 in 合宿

結局、次の日は朝から雨が降って鱒釣りはできなかった。つまらんつまらんとボヤキ続ける森下を見かねて、上級生二人が僕らをモノポリーに誘ってくれた。

モノポリー。土地を取り合って誰かを破産させるゲーム。

早い段階で強い土地を手に入れたのなら、ダイスで良い数字を出すしかない。サイコロが思い通りに転がってくればオレンジやピンクの強い土地が入るし、犬の糞みたいな出目ばつかでボードウォークしか手に入らない、なんてこともある。

その面では僕は二番手といったところだった。上級生の一人、大木さんが一番手でリード、もう一人の灰谷さんが僕を追いかけたの三番手、森下は刑務所だ。

もちろんモノポリーは運だけのゲームではない。チャールズダロウだってそのくらいのことば考えているであらう。

モノポリーの醍醐味は交渉にある。他の人と土地を交換したり、金で買ったりする。大事なのは自分が得することではない。交渉した同士が得し合って、他の人にリードをつけること。

とモノポリー協会のサイトに書いてあった。

この交渉という局面で、僕と大木さんの立場は逆転する。僕はどうかやら、魚の群れを追いかける猟師のように潮目を読み、適当なところで引き際を見つけ出すことが

得意のようだった。

一番手は僕、二番手は大木さん、三番手は灰谷さん、ドベは森下。何回やってもこの結果は変わらなかった。僕は五戦五勝。森下は五戦五敗。

それでも不思議と森下は「つまらん」とは言わなかった。つまりつまるものだったということだ。

ときおり女性陣が僕らの方をチラチラと見ていた。トランプを手に持つ彼女らもまた、雨のせいで暇を持て余していた。誰でもそうだ。人はみな雨が降り出してから、晴れ間の素晴らしさに気がつくのだ。

とモノポリー協会のサイトに書いてあった。

昼を過ぎたあたりで森下のタバコが切れ、夕方の五時を過ぎたあたりで大木さんの集中力が切れた。僕たちは今日だけでももうすでに七ゲームやっている。

「そろそろやめましょうか？」と僕は言った。大木さんは寝転がったまま動かない。灰谷さんは小さく頷いた。

僕がいそいそとボードを畳もうとすると、

「最後にもう一戦だけやろう」と森下が言った。「俺はね、お前に負けたままが我慢ならんのだよ」

「まあ別に僕はいいけども」と僕は答えた。

「でも人はどうする？ 大木さんは多分もう無理だよ」大木さんはビールを飲み過ぎたアメリカ人のように、畳に寝転んでいる。

「人が足りないなら私が入りますよ」

そう言ったのは帯島さんだ。

「楽しそうだなー、とと思ってたので」

僕は灰谷さんをちらりと見た。

「俺もまあ別にいいよ。やろう」

「決まりだな」と森下。

「でもその前に」と灰谷さんは言って立ち上がった。

「顔を洗わせてくれよ。後輩の引き立て役なんて御免だね。この勝負、俺が勝たせてもらうか」

そう言って灰谷さんは、まるで重りを外すかのように上着を脱いだ。

最初に破産したのは灰谷さんだった。見事な最後だった。

残った僕、森下、帯島さんの三人は、盤上でならみ合う展開。僕はインフラを揃え、さらにはオレンジの土地という最強のカードを手に入れている。続くのは帯島さんで、ライトブルー、ライトパープルという強土地を揃えている。苦しいのは森下。持つ土地はダークブルーの一色のみで、あとは電力会社と水道会社。金が足りない。

「俺はね」と森下が言う。「たまには本気のお前に勝つてみたいのよ。だからさ、負けた方がタバコを買いに行くってのはどうだ？」

「僕はタバコを吸わない」

「お前が勝ったら、好きなだけ本を買ってやろう」

僕はその提案に乗った。

その後も似たような展開が続く。僕が着実にリードを広げ、帯島さんがそれを追いかける。

苦しい中でもなんとか踏ん張っていた森下だったが、「アメリカ・カナダ・メキシコ協定」におけるメキシコのように、次第に追い込まれていく。そしてとうとう、

帯島さんの土地にクラッシュした。セントジェームズプレイス。一四〇〇ドル。とうてい森下に払える金額ではない。森下はあつけなく破産。僕はこれから好きなだけ本を買うことができる。ウハウハの人生の始まりだ。

なんてことは無かった。

なんと帯島さん。森下の電力会社と水道会社を一四〇〇

ドル相当で買い取り、森下の破産を回避させる。僕は帯島さんのことを凝視。すいませんね先輩、と帯島さんは笑う。息を吹き返す森下。そしてさらに帯島さんはチャンスカードで「ボードウォークへ行く」を引く。これが決定打。大金が森下の手に渡る。

はかられたと気がついた時にはもう遅い。あれよあれよと形勢が逆転し、僕は敗色濃厚となった。

こんなことがあり得るのか。いや、違う。帯島さんがやけにすんなりゲームに参加してきたときに、僕は怪しむべきだったのだ。そりゃあ帯島さんは森下に手を貸すに決まっている。ガールフレンドだもの。僕は灰谷さんと手を組んで戦わなければならなかったのだ。

見事な最後だった、なんて言ってる場合じゃなかった。僕は唇を噛みしめてゲームボードを見つめた。にやにやと森下が笑う。

「お前今、釣り上げられた鱒みたいな顔してるぜ」

●賭けの清算 in 合宿

タバコの自動販売機は、国道を下った先の橋の付近にある。すでに夕闇が足元まで迫っていて、魚の腹のように光る街灯が道沿いに点滅している。

人の影なんてどこにも見えない。ぼんやりとした60の標識、歩道へはみ出してくる木の枝、その隙間から見える1000000000個の星。ただそれだけだ。

僕は結構、夏の夜の清涼感が好きだったりする。

透明感のある空気に、人々の喧騒はどこか遠い。

「詩人だね」と自動販売機が言った。

よく見たらそれは自動販売機ではなかった。

彼女は髪を短く切り揃えていて、1985が描かれた半袖のTシャツを着ていた。そして彼女は、指の間に火のついたタバコを挟んでいた。

彼女は軽妙な手つきでタバコを口もとに運ぶと、勢いよく吸って、勢いよくむせた。ゲホゲホという咳とともに、なんとも言えないバニラの匂いが漂ってくる。

僕はなんとも言えない気持ちで彼女を見つめた。

「こんばんは」と彼女は言った。

「どうも」と僕は返して、ウインストンの五ミリを買った。

「タバコ吸うの？」

僕は吸わない。これは森下のぶん。君こそ、タバコ吸うんだね」

「まあ、一応ね」

そう言っただけで彼女はタバコを吸うと、勢いよくむせた。

消えかけのキャンドルのように、闇の中にぼんやりと火が浮かんでいる。

「ねえ麦草くんはさ、好きな食べ物とかある？」

僕は、どうしたの急に、という目で彼女を見た。

「私はね、ホットドッグ」

ホットドッグ。

「それから」

それから。

「わんこそばも美味しいよね」

僕は彼女をじっと見つめた。すると彼女も僕のことをじっと見つめ返してきた。そして彼女は慣れない手つきでタバコを口に運ぶと、勢いよくむせた。

「わかったよ」と僕は言った。「僕の負けだ。だからもうタバコは吸わなくていいよ」

僕はポケットからオレンジのガムを取り出すと、一つ

を彼女に手渡し、もう一つを口に放り込んだ。

「場所でも変えようか？」と僕は言った。

「そうしよう、と彼女は小さく頷いた。「ここは自販機の光が強すぎる」

川には魚一匹いなかった。黒々とした透明な水が、戻ることなくさらさらと流れていた。僕は大きな岩の上に腰を下ろした。岩は真夏の冷蔵庫のようにひんやりと冷たかった。

僕はとにかく黙っていた。隣でただの影と化した彼女が、なんらかの音を立てるまで、全力で黙っていた。

「凄いな」彼女が言った。古い言い伝えを話すときのような声だった。「遠くで雷も鳴っていて、とても眠れる気がしなかった。窓には大粒の雨が打ちつけて、外はどこまでも真つ暗だった。なんだか世界の終わりが来たみたいだ。思えてきちゃって、私は暗い気持ちでずつとルードをやっていた」

彼女はそこで息を吸った。

「気がついたらほとんど夜が明けて、雨もいつの間にかやんでた。そしたら、なんだろ。妙に海を見に行きたくなつて。ほら、昔読んだ小説の一文が気になって、読み返したくなることあるじゃない？ そんな感じ。それで朝の海岸線を一人で見に行つた。暗い気持ちのまま明るい景色をずっと見てた。そしたら、」

彼女は僕の方に顔を向けた。

「ボロ雑巾のような麦草くん達がいた」

「伊豆の踊子の時だ」

「そう。江ノ島のとき。この人たちが何言ってるんだろうと思つて。やつてることも意味わかんないし」

でも、と彼女は言う。

「凄く面白いと思つた。今、私の世界が始まったんだな。そこに意味さがあると」

「言い出したのは森下だよ。僕じゃない」

「でもさ」と彼女は言った。「じゃあ、それに着いていく麦草くんは、なにものなんだろ？」

風が吹いて木々が揺れた。彼女はブルンと震えると、両足の間に顔を埋めた。

「なんだかそれを考えているうちに凄く気になつてきちゃつて」

だからね、と彼女は続ける。

「だからね、春先はすぐくシヨクだった。自分は端から麦草くんに認識すらされてなかったんだな」

そう言っただけで彼女はフツツと笑つた。

僕は黙っていた。僕に喋る権利はなかった。やけに虫の音が耳についた。川は「ごう」と流れ、その音色を変えることはなかった。

「いろんなことがあるね。生きることとか、死ぬこととか。ほんとにいろんなことがある。なんだろ。疲れたのかな。よくわからないことを言ってる」

彼女はそう言っただけで笑つた。

夏に消えていきそうな笑顔だった。

でも彼女の影は泣いていた。あめ玉よりも大粒の涙を地面に落として泣いていた。涙は岩に染みこんで消えた。そこに水たまりをつくることはなかった。

少なくとも、僕にはそう見えた。

「どうやら僕が「髪を切つた」と言わなかったことは、彼女にとっても大きな影を落としたらしい。もちろんそんなわけはないはずだけど。きつと彼女もまた、しぶとく生きています。」

*

次の日の朝、僕は森下と帯島さんに睨まれた。僕は見たい番組があったからテレビを点けた。

●彼女の夏は終わらない

僕が悲しみを感ずるときは幾つかある。

一つ目。ポップパンクを知らないと言われたとき。これはさつきも言った通りだ。

二つ目。僕の周りから人が去っていったとき。これもまた悲しい。別に置き去りにされたわけではないし、恐らくその積み重ねが成長するということなんだろう。でも僕はどうしても辛い気持ちになる。

最後に、大切な約束を破れられてしまったとき。これはもう誰だつてそうだろう。受けるショックが大きすぎる。僕にとって大切なことが、相手にとって大切なじゃなかったと気がついたとき、僕は怒りを通り越してただただ泣きたくなる。

どれだけ傷つくことが当たり前になっても、この痛みにだけはいつまでも慣れないままだ。

「空が高くなったねえ」と彼女は言った。その横顔がやけに悲しそうだったのは、僕の気のせいということにした。

●さすがに言い過ぎた話

さすがに言い過ぎた、と思ったときには森下の強烈な右ストレートが飛んできていた。僕は間髪を容れずと、彼の胴体にタックルをかまそうと突っ込んだ。しか

し彼はすかさずそこに左の裏拳を合わせてくる。バキッという濁音とともに、左側頭部に鈍痛が走る。ぐらりと揺れる視界。さらに右の蹴りが飛んでくるのが見える。僕はとつさに左足を上げてなんとかそれを防ぐ。ぶつかり合う脛と脛。凄く痛い。バランスを崩して森下がよろめく。僕はジンジンと痛む左足で踏み込むと、渾身の右ボディブローを森下の腹に打ち込んだ。手ごたえ十分———と思つたが、僕が打ち抜いたのは彼の持つ本だった。お互い飛びずさつて距離を取る。

とまあここまででは嘘だ。

僕は森下の胸倉をつかんで振り回したし、あいつは僕の髪を掴んで引く張った。傍から見たら凄くわちゃわちゃとした取っ組み合いだったに違いない。

結局、騒ぎを聞きつけた守衛さんが僕たちを止めに入つた。僕らはお互い、髪はぼさぼさで鼻からは血を流していた。

●文句を言うな

僕の経験上、あるものはあるし、ないものはない。

トウモロコシ畑なんてどこにでもある。公園の隅にある古びた公衆トイレにも。

●トウモロコシ畑は泥の中

僕と森下がトウモロコシ畑の畝を作り上げた日の夜、入道雲二個ぶんくらの雨が降った。僕はそれを部屋の中から眺めていた。雨の勢いは凄まじかった。古い船ならばあつという間に転覆してしまう勢いだ。

昔から僕の嫌な予感というのはこれでもかというくら

いの中する。色の薄いバタークッキーは焦げ付くし、市営バスは絶妙なタイミングで僕の目の前を通り過ぎていく。

トウモロコシ畑は埋もれる。

僕は直感でそう思った。

あの土地の裏手は崖になっている。木も少ない。雨で土砂崩れを起こしてもなんらおかしくない。そんなことになれば、僕らのトウモロコシ畑はひとたまりもなく土の中に埋まってしまふだろう。

僕は荒波を目の前にした漁師のような気持ちで窓の外を眺めていた。

次の日は、汚れを拭きとったかのような清々しい青空だった。ちなみに「清々しい」は、「きよきよしい」とは読まない。僕と森下はおそろおそろ畑を見に行った。そして僕らは無言のまま、錆びたシャベルを取りに家に帰つた。

すべてが泥の中に埋まってしまつていた。少なくとも二十センチは泥が堆積していて、ところどころにボウリングの玉くらいの岩が転がっていた。人の手で掘り返すのはまず無理だったし、たとえ掘り起こすことができたとしても、畝なんて跡形もないことは明らかだった。

●平成という時代

僕はポップパンクが好きだ。

ポップパンクはどんな季節にもあう。夏には夏の、冬には冬のポップパンクがある。ホットドッグが一年中美味しいのと同じ理屈だ。

でも今年のホットドッグは、今年以外では食べられない、というのが彼女の持論だった。

「去年食べたホットドッグと、今年食べたホットドッグの味が全然違ったのよね。それってつまり、そういうことなんじゃないだろうか」と彼女はチェーン付きの財布を振り回しながら言った。二人で美術館に行った帰りのことだ。

季節はもうすぐ冬を迎えようとしていた。街路樹はいつの間にか身の周りを掃除し始めていて、すっかりダイヤモンドに成功していた。

美術館にずっといると、トイレに行きたくなるのは僕だけだろうか。僕は若手美術家の手がけた意味のわからない便器に用を足すと、ごちやごちやとした回廊を抜けて彼女の元へと向かった。昼過ぎの美術館は閑散としていて、部屋には僕ら以外におじいさんとカップルが一組いるだけだった。

ホットドッグでも食べにいこう、と彼女に言おうとして僕は口を閉じた。

彼女は変な絵を見ながら、静かに泣いていた。

そのときの彼女がなんの絵を見ていたか、僕は覚えていない。

でもなんとなくコンビニの絵だったような気がする。コンビニは当時の僕らにとって寂しさの象徴だった。平成はコンビニの時代だったと言っても過言ではない。小さいレコード店はコンビニになった。昔ながらの書店はコンビニになった。僕らの思い出はコンビニになった。

平成は、コンビニの時代だった。

●エメラルドグリーンの街

みな冬眼前のクマのように、分厚い毛皮を羽織って街

を歩いていた。どこもかしこも電飾で彩られていた。街路樹は青色に、服屋の店頭は緑色、信号機は赤かった。

時刻は七時を示していた。約束は六時。

僕は凍傷になりそうな手でスマートフォン画面を眺め、何度も点けたり消したりした。

事故にでもあったのか。重たい荷物を持ったおばあちゃんを助けているのか。それとも

なんにせよ僕は、待ち合わせに彼女が来ないことをなんとなく察していた。

理由はわからない。でも少なくとも僕は、今までの人生の中で、最も大事な約束を破られたことになる。そして悲しいことに、今となっては「僕にとって」最も大切な約束だった。

街の明かりを消して、家に帰りたい、と僕は思った。

●金魚鉢のような部屋

僕はポップパンクが好きだ。

嬉しい時も、悲しい時も、寂しい時も、いつだって僕はポップパンクを聞いていた。そのせいで、お気に入り

の曲には数えきれないほどの記憶が染みついていた。例えば、ハイスクールネバーエンズには、愛犬と生活した日々の記憶。

僕は愛犬と一緒にいるのが好きだった。

真夏のプールサイドのような街の中でも、金魚鉢のような部屋の中でも、僕はいつも彼女の姿を求めていたし、彼女もまた僕の姿を見かけると、とても嬉しそうに駆け寄ってきたものだ。

今にして思えば、僕と彼女には、なんらかの信頼関係が築かれていたようだ。

でも結局、彼女も僕の手からは離れていってしまった。

●すぐそこにあるもの

話は泥に埋まったトウモロコシ畑に戻る。

僕はとにかく泥をすくい続けた。泥は、煮詰めすぎたカレーのようにこった返っていて、すくってもすくっても一向に減る気配はなかった。

僕は何かに取りつかれたかのように、ひたすら泥をすくい続けた。泥をすくわなければならない、という謎の執着が僕にはあった。

森下にその執着があつたかについては、僕のあずかり知るところではない。でもやっぱ、彼にもあつたのだと思う。なぜなら、僕たちは一言もしゃべることなく、太陽が南中高度に達しても、一心不乱に泥をすくい続けていたからだ。

僕は何度も何度も、どうして僕は泥をすくっているのだろう、と思った。どこに泥をすくう必要があるのだろうか、と。僕はどうしてこの行為に意味を感じているのだろう。僕は果たして何者なのだろう。

そんなことを考えているうちに、いつの間にか日が傾き始めていた。腕はパンパンでとうの昔に限界は超えていたし、さつきまで騒々しいほど鳴っていたお腹は、音を出すことを諦めたようだった。

喉が渴いていた。とにかく僕は喉が渴いていた。喉が渴いているうちに、日が暮れた。足元さえ見えなくなつた。それでも僕はシャベルを握って泥をすくった。

隣からは、森下が泥をすくう「ザクツ」という音が聞こえてくる。でも僕にはもう、それが森下であることを証明する手段がない。

虫の音が綺麗だ。

僕は真つ暗闇の中、泥をすくい続けた。泥はいつまでたつてもその重さを変えなかった。一定の負荷を僕の腕に与え続けた。

僕は泥をすくう必要がある。泥をすくって、トウモロコシ畑をつくる必要がある。そのためには、僕は泥をすくう必要がある。僕にはそれが完璧な理論に思えた。

どれくらい時間が経っただろうか。

カチン、という手ごたえが泥の中にあつた。石ではなかった。明らかにプラスチックの音だつた。

僕は老人のような手つきで泥の中を探ると、それをなんとか掘り出した。それは十五センチ四方の薄いプラスチックで、どうやらCDケースのようだつた。

僕は見なくてもそれがなんのCDかわかつた。

あの日、あのととき、僕が耳にしたポップパンクのCDだ。僕はまじまじとその黒い塊を見つめた。もうすでにそれは意味を失つていた。

僕は手をとめてもう一度じつとそれを眺めた。

そしてようやく、すべてを理解した。

逆だつたのだ。意味のないことに意味を見出そうとしていたのではない。意味があることの意味を、探そうとしていたのだ。

彼女は直感で、僕に生きる意味を見出していた。そしてどうして意味があるのかを、探そうとしていた。

彼女はあのととき確かに、「君はなにものなんだらう？」と言つた。きっとそれは決して僕に対する問いかけではなく、彼女自身に対する問いかけだつたに違いない。

どうして僕は泥をすくうのか。どうして僕はトウモロコシ畑をつくるのか。

きっと僕は彼女に、ポップコーンを食べてもらいたか

つたのだと思う。

泣いた。なんだか無性に悲しくて泣いた。

どれくらい泣き続けたらう。ようやく僕の涙腺が枯れて来たころ、徐々に空が白み始めた。

やけに清々しい気分だつた。

終わっていくもの、過ぎ去っていくもの。その繰り返しの中で、かならずやってくるもの。

水平線の向こう。

ブワツと強烈な朝日があたりを一閃した。

僕は眩しくて目を細めた。泥を薙ぎ払うかのような光だつた。僕はその強烈な光の中に、彼女の姿を見た。

そのとき、僕はもう二度と彼女に会えないことを理解した。

●エンドロールに似ている

僕はポップパンクが好きだ。

響きが良いし、曲も明るい。ポップパンクが好きなのに悪い人はいない。

そしていくつもの曲に、いくつもの記憶が染みついている。モノポリー、流れるプール、ダブルカツカレー。

悲しいことに、氷を落としても、食べてくれる彼女はもういない。そこに水たまりができるだけだ。

でも僕は、その水たまりに光が反射してキラめくたびに、なんだか優しい気持ちになれたりする。

僕はポップパンクが好きだ。

昔からずっと。

もちろん今も。

そしてきつとこの先も。

でもどうしても、悔しいけれど、彼女にはロックンロールがよく似合う。

僕はポップパンクが好きだ。

ポップパンクは僕に底抜けの明るさをくれる。

時にはその光に身を焼かれそうにもなるけど、それはそれで楽しむことにしている。

僕はポップパンクが好きだ。

ポップパンクは僕に底抜けの明るさをくれるとともに、ほんの少しの寂しさを運んできてくれる。

実は、僕はこの小説をとある女性のために書いた。と言っても過言ではない。

その女性というのはもちろん、ミランダ・カーのことではない。小説の中に幾度となく登場する「彼女」のことである。

彼女の人間性というのは小魚のように捉えづらく、水の中を凄く速さで行ったり来たりする。ときにはビートルズのようなハイセンスのかつこよさを見せたかと思うと、真つ赤なアメ車のように、プスンとガス欠になったりする。

でもまあいずれにせよ彼女の存在が、僕に大きな影響を与えたことは間違いない。なにせ実際に僕はこのような小説を書いているのだから。

こう書くと、この小説がまるで僕から彼女に宛てたラブレターのように見えてしまうかもしれないが、そんなことはまるでない。

むしろ僕はこの小説を、彼女への挑戦のつもりで書いている。

きつと僕はこのあとがきを書き上げた後、この小説を持つてまっ先に彼女のもとを尋ねるだろう。そして彼女に一通り読んでもらった後、釣り上げられた鱒のような顔をしている彼女に、僕はこう言つてやるのだ。

「もし僕があの日、あるとき、君に軽々しく「髪切った？」なんて口にしていたら、こんなに素敵な小説が生まれることもなかっただろう。だから僕はあの日、の判断は決して間違いでなかったと思つてるよ」

だつてさ、と僕は言う。

僕の目の前にいた彼女が、一度だつて同じ姿だったことはあるか？

夜遅くに小説を持つて彼女のもとへ飛び込んでいった挙句、花も恥じらう乙女の顔を鱒に例えた僕に対して、彼女はこう言った。

「猫っぽい犬も犬っぽい猫もいていいじゃないか」なるほど。

やはりボブ・サップになりたいとか言つてる人間の言うことは違つ。

この話がどこまで本当でどこまで嘘かは適当に判断してもらつて構わない。

たぶん大体嘘だ。